

# 市場價格の周期的變動と恐慌

種 瀬 茂

I 問題點

II 不均衡化の過程

III 恐慌および均衡化の過程

IV 結びにかえて

## I 問題點

Karl Marx (1818—1883) によって把握された社會的總資本の再生産と流通の過程の分析（『資本 Das Kapital』第2卷第3篇に主として展開されているいわゆる「再生産表式」分析）は、その理論の抽象性からして、當然、社會的總資本の「理想的に圓滑な、そして均衡のとれた再生産と流通」<sup>1)</sup>を解明しており、そこにおいて資本主義生産の基本矛盾がいかに發現しているかを、いわゆる「不均等的發展」の様相において、示しているのである<sup>2)</sup>。それゆえ「実際には、實現の過程は現想的に圓滑な均衡性を伴っておこなわれるものではなくて、ただ『諸困難』『諸動搖』『諸恐慌』等々のうちでのみおこなわれるのである。』<sup>3)</sup>と理

解される。しからば、この再生産・流通過程が、貫徹している實際の狀況、そのたえまない動搖の態様を把握するには、いかにすべきであろうか。そして、この「再生産表式」における矛盾の發現としての「不均等的發展」がいかにしてより具體的態様をとって現われるか、を解明することが要請される。

第2次大戰後、東ドイツにおいて發表された Fred Oelßner (1903—) の著書<sup>4)</sup>は、周期的恐慌に關するマルクス經濟學による解明を簡潔に總括しているゆえ、かれの見解を學んでみよう。Oelßner は、前述の具體的な様相把握を「不比例性 Disproportionalität の發生という點においている。すなわち、「資本主義の發展のこの不均等性 Ungleichmäßigkeit の結果、必然的に、社會的生產の個々の諸部門もまた均等には發展しないし、これらの諸部門のあいだには通例として、比例性ではなく、不比例性が存在することになる。……この不比例性は、それが再生産の續行を不可能にする點にいたるまで、發展する。やがて、一つの恐慌によって、比例性、均衡 Gleichgewicht が瞬間的に回復させられる」<sup>5)</sup>と。しかしながら、不均等性と區別された意味の不比例性は Oelßner の解明によって、必ずしも明確にされていない。かれはある場合には明らかに、いわゆる「不均等的發展」そのものを指して、兩部門間の不比例性

1) W. I. Lenin, *Nochmals zur Frage der Theorie der Realisierung*. 1899. im „Anhang zu Karl Marx, Das Kapital, Bd. II. Berlin, Dietz Verlag, 1953.“ S. 571. 邦譯『レーニン全集』第4卷, 1954, p. 91.

2) W. I. Lenin, *Die Entwicklung des Kapitalismus in Rußland*. 1899. im „Anhang zu Karl Marx, Das Kapital, Bd. II. Berlin, Dietz Verlag, 1953.“ SS. 580, 582. 邦譯『レーニン全集』第3卷, 1954, pp. 31—2, 33. 「生産の（したがってまた國內市場の）發展が、主として生産手段の増大によることは逆説的であるかのように見えるし、疑いもなく矛盾である。これが、本當の「生産のための生産」、すなわち、それに照應する消費の擴大のないこの生産の擴大である。しかし、これは學說の矛盾ではなくて現實の矛盾である。これは、とりもなおさず、資本主義の本性そのものおよびこの社會經濟制度のその他の矛盾に照應する矛盾である。ほかならぬ、それに照應する消費の擴大のないこの生産の擴大こそ、資本主義の歴史的使命とその固有の社會的構造とに照應している。」

3) 前掲註1 參照。

4) Fred Oelßner, *Die Wirtschaftskrisen, Erster Band; Die Krisen im vormonopolistischen Kapitalismus*. Berlin, Dietz Verlag, 1953. エルスナー著, 千葉秀雄譯『經濟恐慌—その理論と歴史』1955.

5) Oelßner, *ibid.* S. 47. 邦譯 p. 58.

と理解している<sup>6)</sup>。前述のごとく、ここで OelBner が研究対象としている「再生産表式」は、理論的に比例性を前提しているのであるから、上のごとき OelBner の理解は誤解をみちびく。かれはさらに、兩生産部門間のみならず、諸種の産業部門とその内部での産業グループの間における不比例性の缺如を意味せしめている<sup>7)</sup>。このような不比例性がいかにして発生し、発展してきたのであろうか。OelBner はつぎのように指示する。「資本主義的現實においては事態はもっとはるかに複雑である。……それらの産業諸部門と産業群すべてのあいだには一定の比例性が存在しなければならないのである。ここには、比例性を維持するチャンスよりもそれを破壊するチャンスの方が、すなわち、攪亂されることのない経過のチャンスよりも恐慌のチャンスの方がより多く存在することは、明白である。」と<sup>8)</sup>。このことは、すなわち資本主義的生産方法の無政府性によるものであり、OelBner 自らこの無政府性と不比例性を同一視している<sup>9)</sup>。しかしながら資本制生産の無政府性は、それ自體としては、いわゆる恐慌の可能性を示すものであり<sup>10)</sup>、その現實性への展開の一指標たる不比例性を直接的內容として示すものではあるまい。もし OelBner の述べるごとくであるとすれば、資本主義的生産においては、ほとんど常に恐慌状態にあることとなるのではあるまいか。

それゆえ、OelBner の示すごとき不比例性が再生産・流通過程の進むにつれて、次第に累積され、ある時点まで進んだ時、暴力的に恐慌によって比例性・均衡が回復されざるをえないという具體的様相はかれ自らの分析において不明のまま、のこされているものといわざるをえない。

このような無政府性の状況の中での再生産・流通過程の経過は、資本のさらにすすんだ「現實的

運動」において分析されねばならないであらう。Marx はこれを『資本』第3巻において、まず一般的利潤率の成立とその傾向的低下の法則として把えている。

市場において運動する諸資本は、特別剰餘價值（特別利潤）の獲得を目指し、その資本の有機的構成の高度化によって、他資本を壓倒し、生産を發展せしめる。諸資本間の競争は一方では諸商品の個別的價值から一つの同等の市場價值・市場價格を成立せしめ、他方諸生産部門の異なる利潤率を、資本移動によって均等化し、一般的利潤率・生産價格を成立せしめる<sup>11)</sup>。と同時に資本制蓄積が競争を通じて進み、一般的利潤率の傾向的低下となって發現してきたのである。

この市場における競争と資本の移動は、市場價格を媒介として行われる。需要が強化されれば資本がその部分に移入して供給を増し高められた市場價格は低下し、市場價值にまでひき下げられる。逆の場合も同じである。この變動の経過を通して、需給の均衡化が行われる。こうして市場價格は市場價值にひきよせられ、社會的總資本が全體として比例性を保持されうる方向に運動し發展する。このプロセスを通じて「表式」に示されるごとき再生産の構造が發展運動を續けているのである。

しかしながら、以上の運動はいわば均衡化のプロセスを示しているのであって、それは、資本の無政府的生産が生み出す様々の不均衡を均衡化させる力を示している。またそれ自體生産と領有との資本主義の矛盾から發し、それが諸資本と労働との兩者間及びそれぞれの内部での競争すなわち市場の具體的状況の中でいかに發現するかを示しているといえよう。だがそれは矛盾が爆發し、それを暴力的に解決し、強力的に均衡化をはかる、というプロセスではなく、いわば矛盾がその形態の内部で解消されてゆく「しづかな均衡化」<sup>12)</sup>ともいふべきものである。矛盾はここでそれ自體の

6) OelBner, *ibid.* S. 53. 邦譯 p. 65—6.

7) OelBner, *ibid.* SS. 55—6 邦譯 pp. 68—9.

8) OelBner, *ibid.* S. 56 邦譯 p. 68.

9) OelBner, *ibid.* S. 56. 邦譯, p. 69,

10) Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert*, herausgegeben von Karl Kautzky, Bd. II. Teil. II. [Friedenau, 1905], 5. Aufl. Stuttgart, 1923. SS. 283 ff. 長洲譯, 國民文庫版, 第2冊, pp. 260 以下.

11) Karl Marx, *Das Kapital*. Bd. III, Berlin, Dietz Verlag, 1953. SS. 205—6, 921. 長谷部譯, 日本評論社版, 第9分冊 p. 76, 第11分冊, p. 492.

12) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*. Berlin, Dietz Verlag, 1953. S. 309. 邦譯, 『マルクス・エンゲルス選集』第9巻, p. 330.

發現様式をもちつつ運動化することによって解決されてゆくのである。

Oelbnerはこの競争場裡における資本の運動が、不均衡 *Misverhältniss* を生み出すのであり、それが恐慌の新しい要因を作ると解明している。その不均衡とはつきのごとくである。「資本の生産諸条件の諸變化——それは資本の有機的構成の變化となって現われる——は、生産価格の形成にとって、ともかく一つ的前提である市場諸条件 *Marktbedingungen* の直接的變化を生ぜしめるものではない。このため、生産と市場とのあいだに新しい矛盾が生じ、利潤率の平均化は困難となる。」<sup>13)</sup>ここに恐慌の新しい一要因が作り出される。ここに示される生産と市場の矛盾、その不均衡の展開は、前述のごとき競争の作用によって解決せられうるものであろうか。恐慌によって、それが瞬間的に均衡化せられる、とされるのであるならば、その不均衡はいかなる態様をなすものであろうか。Oelbnerはその分析をそれ以上にすすめてはいない。

恐慌によってはじめて解決せしめられるところの不均衡の内容は、市場における社会的需給関係の間の不均衡として把握せねばなるまい。それは各種生産部門の生産の不比例性の市場における發現の態様である。そしてその態様の一つの指標として市場価格の市場価値（生産価格）の乖離と一致の運動を見出す。

そこで、恐慌から恐慌にいたる一循環の経過の中での、上のごとき諸運動の経過を追求しよう。それはまた、価値と価格との関連を把握すべき、一つの手がかりともなるであろう。

## II 不均衡化の過程

資本の競争場裡における運動の目標はより大きな利潤の獲得にある。それは前述のごとく特別剰餘価値（特別利潤）の獲得を目指す資本の有機的構成の高度化によって遂行される。かくして生産力は發展せしめられる。この事態は不均等的發展の示すところであり、利潤率の傾向的低下はその

一そう具體的態様というべきものである。

しかしこの理解において一見、矛盾した現象につき當る。すなわち好況の局面における一般的な物價騰貴である<sup>14)</sup>。前述のごとく、競争場裡においては資本の蓄積の進行とともに有機的構成は高度化し、労働生産力は高まり、商品一個當りの価値は低下の傾向にある。しかるに現象はむしろ逆である。

この事態は Oelbner によってつきのように把握されている。「改善された機械の充用の結果として有機的構成の高度化が現實に高まる産業上の好況時には、価格は高騰し、それとともに利潤も増大する。したがって、有機的構成の高度化にも拘わらず、利潤率は低下するかわりに、増大する。」と<sup>15)</sup>。しからば一般的利潤率低下の傾向的な運動はいかにこの現象と関連して理解しうるのか。Oelbnerはそこで「停滞が現われるにいたって、はじめて、傾向的低下の法則は活動的となり、自己を貫徹しはじめるのである。この法則もまた、……暴力的にのみ、すなわち恐慌を媒介としてのみ、自己を貫徹することができるのである」と理解する<sup>16)</sup>。これではあたかも好況段階においては利潤率低下の運動はないかのごとくである。このような誤りは何によるのであろうか。すなわち好況時における市場価格の一般的騰貴の傾向を市場価値と同一視し、兩者の相対的な乖離の傾向を無視するがゆえである。一般的利潤率の傾向的低下は恐慌と循環を通じて不斷に進みつつあるところの發展を貫く長期の法則として把握されること、いうまでもない<sup>16)</sup>。

市場価格の市場価値からの乖離において把握される不均衡がいかにして發生するのであろうか。好況が進展してゆく段階を見よう。そこでは競争の中で特別利潤の獲得を目指す資本は、生産力の

14) Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. I. Berlin, 1953. S. 652. 邦譯, 第4分冊 p. 117. Bd. III. SS. 488, 925. 邦譯, 第10分冊 pp. 226—7, 第11分冊 p. 499.

15) Oelbner, *op. cit.* S. 70 邦譯, p. 85.

16) Marx, *Das Kapital*, Bd. III. S. 191. 邦譯, 第9分冊, p. 48. 「一般的利潤率における現實的變動は、……極めて長期間にわたる一聯の諸動搖の遠いさきの仕業である。」

13) Oelbner, *op. cit.* S. 62. 邦譯 p. 76.

より高い、有機的構成のより高度な資本として投下され、それにより一そう価値においても質料においても生産量を拡大してゆく。こうして投下される資本は、一方では生産手段に対する需要として、他方では労賃支出を通じて消費資料に対する需要として市場に現われる。この需要の増大は、それぞれの部門に市場価格の騰貴をひきおこす。それに對して生産が増加され、供給は増し、市場価格は低下する。問題點は、まさにここにある。全般的に好況の段階にある諸資本はこのような市場価格を指標とする均衡化の運動を行いつつ、利潤獲得のための蓄積と拡大を強力に進行せしめる。生産は生産のための生産として進められるのである。それは一方では前述のように社会的需要となつて發現するのであるが、その需要が満たされ供給がそれに比例されうるのはまさしく事後的に市場価格の變動を通じる作用の結果なのであって、他方の生産のための生産が、つねにこの均衡化の作用により運動せしめられつつ、蓄積を進行させ、均衡化作用の完全にゆきつく先に、次々と生産を拡大し、一そう大きな社会的需要をひきおこす。生産と流通とが事前的に社会的比例を保ちえない資本制生産において、生産のための生産・利潤のための生産は、ここにおいて社会的需要を堅調に保たしめ、市場価格は市場価値より上方に乖離する傾向を生ぜしめる<sup>17)</sup>。

このような市場価格の市場価値からの乖離は、販賣と購買との分裂、資本の生産と流通の分裂という資本制商品生産のうちに、その可能性が與えられてきている。全社会的労働が統一的に統制されていない資本制生産にあって、必然の運動態様であるところのこの市場における資本の競争は、とくに商業および信用の作用として資本が獨立化することにより、より具體的姿態をとってあらわれる。すなわち、商人資本の獨立化は、一そう販

賣と購買との分離を激しくし、資本の姿態轉換を分裂せしめ、生産からの供給がその本來的な需要に相應して、その轉換を完了することなしに、その間にある商人資本によって供給は消化され、一そう擴大された生産過程が進行せしめられる。好況段階の進むにつれて、それは強められ、「假空の需要が創造され」、見込需要に刺戟されて、生産は一そう進行することとなる<sup>18)</sup>。そしてこのことは資本が利子生み資本として獨立化し、信用が全面的に、資本の生産・流通に支柱を與えることにおいて、激化される<sup>19)</sup>。投機的作用は、その最も極端な發現である<sup>20)</sup>。このようにして、生産は「生産諸力を最高度に緊張させ」<sup>21)</sup>、そして生産がその本來有する「弾力性」の制限をこえて發展せしめられるのである<sup>22)</sup>。

このような状況は、不均衡化の過程として把握できよう。その基本的内容は、市場価格の市場価値からの傾向的な乖離（好況の段階における上方への乖離）の過程として把握することができるのである。それは、生産のための生産が、生産力を無制限に發展させる傾向をもち、供給を増すと同時に、他方社会的需要を喚起し、その強調を保持させることによって、とるところの市場に發現する資本の運動態様の傾向というべきものである。

このことはいわゆる「再生産表式」に示される不均等的發展の作用が、市場における競争の作用を通じて發現した態様であることというまでもない。

この市場価格の市場価値からの上向への乖離の傾向は、まず第一に利潤の上昇を意味し、それは一そうの擴大再生産に刺戟を與え、いわば資本の再生産をその能力の限界まで、緊張せしめる。市場価格の視點において、これを把えるならば、市場価値の視點において把えられた再生産の構造（価値においても使用価値においても）からは、

17) Marx, *Das Kapital*. Bd. II S. 315. 邦譯, 第6分冊, p. 307—8 「たえず生産資本の諸要素が市場から引上げられ、そしてその代りに貨幣等價のみが市場に投げ入れられるのであるから、支拂能力ある需要が、それ自身からは何らの供給要素も提供することなしに増加する。したがって、生活手段や生産材料の價格が騰貴する。」

18) Marx, *Das Kapital*, Bd. III. SS. 335—6. 邦譯, 第9分冊, pp. 317—8.

19) Marx, *ibid.* S. 535. 邦譯, 第10分冊, p. 310.

20) Marx, *ibid.* S. 482. 邦譯, 第10分冊, pp. 214—5.

21) Marx, *Das Kapital*. Bd. III. S. 534. 邦譯, 第10分冊, p. 308. cf. *ibid.* S. 529. 邦譯, p. 295.

22) Marx, *ibid.* S. 335. 邦譯, 第9分冊, pp. 316—7.

いわばより膨張した規模で、再生産と流通の過程が進行しているのである。こうしてこの不均衡化の過程は、恐慌による中斷に向って進む。

もちろん再生産の進行は各生産部門およびその内部において、比例性を保持しえない。ことに、重要な要因は第1部門と第2部門の間の交換であることはいうまでもない。それぞれの分野での生産の進行は、一定の関連のもとにありつつ、しかもなお、市場價格の騰貴の程度はことなる。それが一定に保持されうる保証はない。ことに固定資本の生産と流通は、それが蓄積の發展とともに巨大化される程、生産期間は長くなり、またその回轉期間も長期化される。それは第2部門からの需要に對して、供給をおくらせ、その市場價格を上昇せしめる作用を強く示す。さらに有機的構成の高度化の作用は第1部門の生産手段にも一そう強い需要を、しかも擴大された規模でひきおこすであろう。これらそれぞれの社會的需要の強調の程度は、決して一様ではなく、かくして市場價格の市場價值からの乖離の程度も一定ではない。それゆえ生産の擴大も決して一定の比例を保って進みえない。消費資料と生産財との比例關係は、非常にことなつたものとなるのである。しかしそれがどの程度となるかは、具體的分析によって解明しうるであろう。

もちろんこのことから比例性が破られていることにより、ただちにもつて恐慌の突發を意味するのではない。販賣と購買との、資本の生産と流通との分裂が、この乖離を可能ならしめ、再生産の弾力性を極度にいたるまで、緊張させてゆくのである。その極度の緊張が保持されえなくなるとき、分裂は突如、統一化される。好況段階において累積せしめられた不均衡は、恐慌によって暴力的に瞬時に均衡化せしめられざるをえない。

以上のように市場價值からの市場價格の（上方への）傾向的乖離として、不均衡化の過程として、好況段階を把握することによって、全體的な生産と流通の矛盾の擴大累積が、その爆發の極限まで、進行しゆくことを理解しうるのである。

それゆえここにいう不均衡ということとは、最も現象的な日常に見られる價格の變動そのものを示

すものではない。そのような不均衡は、資本の移動による均衡化への作用により消化されつつあり、しかもそのような競争場裡での資本の運動が、その均衡化作用をつねに行いつつ、しかも全體として發生せしめる不均衡が、ここでの問題なのである。それは各個別資本のより高い利潤獲得を目指す、資本としての運動が、全社會的に把えると、社會的需要の堅調となつて發現し、市場全體として不均衡化への過程となつて發現するものと、理解されるのである。ここに、各個別企業内の統制的活動が、社會全體として矛盾を發生せしめる態様が明らかとなる<sup>23)</sup>。

本節冒頭に示したごとき、好況段階に實際に見られる一般的な市場價格騰貴の傾向は、以上のごとき價值と價格との乖離・不均衡化の過程として把えることができるのであり、一般的利潤率の低下は、以上の経過を貫通して進行しつつあるものと理解されるのである。

### III 恐慌および均衡化の過程

前述のごとき不均衡化の過程が、無限に進行しえないことはいうまでもない。その限界は何によって限られるであろうか。

それは基本的には一般的利潤率低下にともなう、資本の「絶對的過剰生産」<sup>24)</sup>に起因する。すなわち擴張再生産の進行とともに、有機的構成の高度化が巨大産業の發展をうながし、その支配が廣範になるにつれて、その絶對量は巨大となる。そこで利潤率がさらに低下するとき、生産の擴張と高度化が競争の強制によって、おしすすめられるとき、もはや全體としての利潤量が増進されえない、むしろ減少されるごとき段階にまでいたる。追加資本は利潤を目標とする資本制生産においては、その限界につき當って遊休せざるをえない。このことは、巨大資本によってすでに生産から驅逐された小資本による壓力によって、一そう強化される。ここに、資本制生産がその生産の制限を

23) Marx, *Das Kapital*. Bd. I. S. 373. 邦譯, 第3分冊, p. 89.

24) Marx, *Das Kapital*. Bd. III. S. 280. 邦譯, 第8分冊, p. 214.

資本自らのうちに見出す<sup>25)</sup>。この制限は恐慌によって、周期的に突破される。

しからばこのことは市場の競争場裡における、市場価格の運動の中にいかに發現するであろうか。市場価格のうちを示されるいわば市場の一般的利潤率がどの程度市場価値視點からの一般的利潤率からの乖離としてあらわれるかによって異なるであろう。しかし社會的需供の関係はつねに均衡化の作用によって、ひきしめられているのであり、その點において、全體的に言えば、この乖離はそれにひきよせられる傾向をもつ。他方、好況の進行とともに労働力の価値の騰貴にもとづく利潤の低下<sup>26)</sup>、利子率の騰貴による企業者利潤の低下<sup>27)</sup>という、利潤削減の主要因があらわれる。それゆえ、價值的視點から見るとはるかに膨張された規模において、利潤の増進が市場の利潤率の低下をおぎないえない點に到達する。追加資本は遊休化し、競争は一そう激化する。

ここにおいて、生産の極度の緊張を保ってきた生産と流通の関連の中で、資本の遊休化が生ずることが、再生産過程に重大な影響を及ぼす。緊張状態にありつつ、しかもより擴大する規模において、生産と流通は関連しあってきたのである。一部の遊休化した資本は、そこから生ずべき生産手段、消費資料への社會的需要を、突然減退させる。ひとたび、この需要の缺如が暴露すると、市場価格の市場価値からの乖離が今や顯在化されざるをえない。生産され供給されている資本に対して社會的需要は一きよに縮小し、價格の暴落が發生する。

その突發的な市場価格の下落が、重要商品をおそうとき、全體系が連鎖的に、崩落する<sup>28)</sup>。こうして全般的な生産と流通の中斷として、過剰生産恐慌が爆發する<sup>29)</sup>。

25) Marx, *ibid.* S. 278, 286. 邦譯, 第8分冊, p. 212, 216.

26) Marx, *ibid.* S. 280. 邦譯, 第8分冊, p. 215.

27) Marx, *ibid.* SS. 533—4. 邦譯, 第10分冊, pp. 307—8.

28) Marx, *Theorien.* Bd. II. Teil. II. S. 312. 長洲譯, 國民文庫版, 第二冊, p. 294.

29) Marx, *Das Kapital.* Bd. II. SS. 315—6. 邦譯, 第6分冊, pp. 307—9. *Das Kapital.* Bd. III. S. 285. 邦譯, 第8分冊, pp. 219—220.

この社會的需要の突然の縮小, すなわち, 市場における實現の不能が, どの時點に發現するかは, 具體的分析によって把えねばならない。それは市場における實現条件の具體的なあらわれを把えねばならず, 競争場裡にあらわれる前述の諸要因, すなわち利潤率, 勞賃, 利子率 (さらに地代も加えねばならぬ) はその解明に際して注目さるべき最も重要な要素となる。

前節に述べたごとく, 市場競争裡において資本制再生産と流通は, ある弾力性をもち, その中にあって各生産部門とその内部の諸産業は一定の限度まで, 不比例性そのまま發展しうるのであり, その指標は一般的に市場価格の市場価値からの上方向への乖離として把握しうるのであるが, その不比例の程度, 乖離の程度の大なる程, 恐慌による均衡化が激しい影響を與えることは明らかである。資本制再生産と流通が不均等に發展し, 生産手段生産の急速な發展を迫るゆえに, 不均衡化の過程における不比例は生産手段の生産における動搖をより大ならしめるであろうし, 均衡化はそれに, 一そう激しい價格の暴落と價值破壊を強制する。

こうして, 不均衡化の過程において, 弾力性をこえて膨張せしめられた生産によって生み出された資本制商品は, 恐慌による價格の暴落において實現不能におち入り, 「社會的欲望を超過する程度に生産された」一定商品はその「社會的労働時間の一部が浪費されたのであって, この場合には, この商品量は, 市場では, 現實にそれに含まれているよりも遙かに少量の社會的労働を代表するのである。」<sup>30)</sup>

かくして恐慌は, 生産のための生産という資本制生産の矛盾たる市場の競争場裡における社會的需給の不均衡の累積を一きよに解消せしめる。その要因は利潤のための生産という資本の生産が, その内的制限を自らに課することによる資本の絶對的過剰であり, それによって生ぜしめられる遊休資本と, 實現の不能とである。

このようにして恐慌は社會的總資本の再生産を

30) Marx, *Das Kapital.* Bd. III. S. 213. 邦譯, 第8分冊, p. 90. cf. Marx, *Das Kapital.* Bd. I. SS. 111—2. 邦譯, 第1分冊, pp. 352—6.

中斷・停止せしめ、資本の物的・價值的な大量の破壊をもたらす。他方失業者の急増、勞賃の暴落が生ずる。こうして生産のためには、新しい地盤が形成される。高度の生産力をもつ個々の資本は、費用價格の低下により、利潤を生み出す機会を與えられ、投資と生産が再開される。こうして恐慌から不況への進行が行われる。新設備は一そう有機的構成を高度化し、前循環よりも、一そうの利潤率の低下をもたらすところから、新しい循環がはじまる<sup>31)</sup>。

この不況の局面においては、生産は次第に増加し、それにつれて生産手段、消費資料への社會的需要をよび起す。しかし生産の發展速度はかんまんであり、また多くの遊休設備と、在庫商品群の存在は、社會的需要の増加に對して、供給の強調をもたらす。それは、市場價格の短期上昇をただちに相殺し、さらに、市場價格の市場價值以下への低落を維持せしめる。こうして、生産からの供給の壓力が社會的需要をおさえ、市場は均衡化の過程にある。ここでは、社會的需要の關連を通じて「しづかな均衡化」が行われる<sup>32)</sup>。

さらにこの不況の段階がすすむにつれて、生産は擴大し、それにつれて社會的需要の強化があらわれ、固定資本の投下が急速に進展するようになって、ふたたび好況の段階へ、すなわち、不均衡化の過程にまで發展する。このようにしてふたたび恐慌へと突進するにいたる。

こうして、社會的總資本の再生産の發展は恐慌を起點とし、均衡化の過程と不均衡化の過程をたどる、一定周期の循環の形態をとる。その全過程を貫いて社會的總資本の再生産と流通が進行し、一般的利潤率の傾向的低下が進むものと、把握しなければならぬ。さらに、循環は、一そう大規模な生産と消費の矛盾を生み出しつつ、一そう低い一般的利潤率を基準にしつつ進展するのである。

#### IV 結びにかえて

生産のための生産・利潤を求める資本の再生産と蓄積が、同じく資本制生産の基本矛盾から生ずる無政府的生産の狀況・すなわち競争場裡での再生産と流通において、いかなる態様をとるかは、その基本的動向を以上のごとく、恐慌、均衡化の過程および不均衡化の過程として把握することができる。そしてその指標は、社會的需要の關連から生ずる市場價格の市場價值（生産價格）からの上・下への傾向的乖離である。それによってまた、好況期における不均衡の累積と全般的過剰生産とが、恐慌の突然の爆發によって一時的に暴力的に均衡化されることが解明されるのである<sup>33)</sup>。

社會的需要による市場價格の變動態様は、Marxによって、すでにその經濟學研究の初期から考察せられているところであった。1847年の『哲學の貧困 *Misère de la philosophie*』において、David Ricardo (1772—1823) の見解によりつつ、需供關係の變動によって、資本の間斷なき流動がおこり、それを通じて全生産の比例性が保持される<sup>34)</sup>と把えると同時にはやくも、大工業の發生にともなう、比例性保持の不可能をのべている。「大工業は、自分が自由につかっている諸要具そのものによって強制されて、つねにより大規模に生産しなければならないので、もはや需要をまっ

33) 杉本榮一『恐慌・總説』(經濟學新大系Ⅱ, 河出書房, 1952) pp. 39—41. 「市場價格と生産價格との乖離が、競争の作用によって自然に極小化される收斂體系の場合……は、資本主義經濟における原則ではない。資本主義的競争の作用は、原則としては、需要と供給、市場價格と生産價格との乖離をますます大きくし(發散體系)、ついには「諸矛盾の一時的な暴力的解決」「統一の暴力的な自己主張」「諸矛盾の強制的な解決」たる恐慌に導かなければ止まないものであり、」さらにこのような「波動分析」と「資本の有機的構成の高度化の過程、したがってまた一般的利潤率の傾向的低下の過程」についての「趨勢分析」とは、當然からみあう。以上のごとき故杉本教授の問題提起は、すでに1930年代初期に始まるものであり、本稿はその示唆にもとづく一小論にすぎない。なお杉本榮一『近代經濟學史』岩波全書, 1953, pp. 320—3. 拙稿『一橋學問の傳統と反省, 理論經濟學(四)』(一橋論叢, 第34卷第4號, 1955年10月號所收)第2節, 参照。

34) Karl Marx, *Misère de la philosophie*. 1847. in „Marx Engels Gesamtausgabe. Abt. I. Bd. 6. Berlin, 1932.“ SS. 145—6. 邦譯『選集』第1卷, pp. 311—2.

31) Marx, *Das Kapital*. Bd. III. SS. 282—3. 邦譯, 第8分冊, pp. 218—9.

32) Marx, *Grundrisse*. S. 309. 邦譯『選集』第9卷, p. 330.

ているわけにはゆかない。生産が消費に先行し、供給が需要を強制するのである<sup>35)</sup>として、生産のための生産・資本制的蓄積が、需給の関連にいかにかに發現しきたるかを解明している。しからば、そのような需給関係が市場価格の變動にいかにかに示されるであろうか。同じ 1847 年の『賃労働と資本 Lohnarbeit und Kapital』において、「ある商品の現実の価格はつねにその生産費を上下している。しかし騰貴と下落とは相殺しあうために、一定期間内には、産業の満潮と干潮とを合算すれば、諸商品は、その生産費におうじて、相互に交換される。したがってその価格はその生産費によって決定されるのである。」とのべている<sup>36)</sup>。すなわち、「この産業的無政府状態の経過中に、この循環運動中に、競争がいわば一方の極端を他方の極端によって相殺する」のであり、この「變動こそ、その経過中に価格を、生産費によって決定するのである。」<sup>37)</sup>

このような把握は 1850 年代の Marx の本格的な経済学研究を通じて、資本制生産の内的分析が深化され、その體系化がすすめられた後にも、なお維持せられているところである。すなわち 1865

年の講演『賃金、価格および利潤 Lohn, Preis und Profit』においては、一そう明確につきのように示されている。「諸商品の市場価格および利潤の市場率は、これらの段階にともなって〔静穏、好轉、好景氣、事業過剩、恐慌および沈滞の状態という資本主義生産の一定の周期的循環の諸段階にともなって〕、あるいはその平均以下にすぎみ、あるいはそれ以上にのぼる。この周期全體について観察したならば、諸君は、市場価格の一つの背離は他の背離によってうめあわされるということ、およびその周期を平均すれば諸商品の市場価格はその価値によって規制されるということ、を、發見されるであろう。」と<sup>38)</sup>。このような競争による市場価格の周期的運動と、再生産・流通の發展および一般的利潤率の傾向的低下の法則の示す内的な構造とが、どのような関連のもとにあるか、また恐慌における資本制生産の諸矛盾の發現とその一時的解決とにどのように関連されるか、の問題點の一端を整理し、理解することが本稿の目指すところであった。Marx の経済学研究の進展にそくしつつ、一そうの分析の深化と把握を進めることは今後の課題である。 (1956・5・10)

35) Marx, *ibid.* S. 148. 邦譯『選集』p. 317.

36) Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*, 1847. in „Marx Engels Gesamtausgabe, Abt. I. Bd. 6. Berlin, 1932.“ S. 480. 邦譯『選集』第 2 卷 p. 240.

37) Marx, *ibid.* S. 480. 邦譯, 同上 p. 241.

38) Karl Marx, *Lohn, Preis und Profit*, [1865.] Berlin, Dietz Verlag, 1951, S. 68. 邦譯『選集』第 11 卷 p. 94.